



元衆議院議員

辻元 清美さんインタビュー

デマにも負けず。レッテル貼りにも負けず。
リベラルの火は消さない

写真／インタビュー前に笑顔で
撮影に応じる辻元清美さん
(1月10日、東京・四谷にて)

市民の意見30の会と私

吉川勇一さんや小田実さんが「市民の意見30の会」を立ち上げるとき、最初の会議に私は出ていたんです。日本でも意見広告運動をはじめなければ、という会議でした。初当選が1996年ですので、それよりも前ですね。その会が発行する機関誌が188号まで続いてきたということ、「継続は力なり」ですね。そういう意味で、今回インタビューをしていただけたこと、大変ありがたく、楽しみにしていました。吉川さんや小田さんはお亡くなりになりましたが、戦争の反省や憲法をしつかり守って大事にしてきた、そういう人たちの意思を大事にして活動していかなくてはならないと感じています。「市民の意見30の会」の人たちの活動に敬意を表したいと、冒頭に申し上げます。

「わきまえない女」像はこう作られる

この間、森元総理の「わきまえない女性」発言がありました。日本にはどうしても「女はわきまえない」という風潮があります。そんな中で、「わきまえない女」の代表格が、私、辻元清美や蓮舫議員だと思っんですね。女性が強い主張をしたり、問題点を指摘したりすることに対して男性から批判が来るということとは、私自身も日々感じているところです。しかし、これは私だけの問題ではなく、組織や会社の中で、女性が意見を言う、権力や体制を批判することに対しては、男性が同じことをするより非難される。「またギャーギャー言っている女」というレッテルが貼られがちです。これも女性蔑視の一つの表れだと思います。

私はこれ、メディアの影響が大きいと思っています。強い言葉でやり取りしてい

る、やり込めている場面が繰り返し使われるわけです。今でも私が「総理、ソーリ、ソーリ」「あなたは疑惑の総合商社だ」と言い放っている映像が切り取られて流されるということがあります。つい先日、私の紹介で、もう20年以上前の映像が出されるわけですね。その前後でどういう議論がされてきたのかということは関係なく、たった数秒、長くて15秒くらいの映像がテレビで流されるわけです。私が「総理、ソーリ、ソーリ」と小泉総理に迫ったとき、何を議論していたかは誰も気にしない。あれは集団的自衛権の行使について議論していた、小泉さんがお答えにならないので、「総理大臣はそれでいいんですか?」というところで「総理、ソーリ、ソーリ」になったのです。

安倍総理の時にも、憲法について延々と議論してきて、その議論が終わった後に、

安倍さんが私にやじを飛ばしました。それで議場は騒然となりました。総理大臣が質疑者に対して、つまり立法府の議員の私が行政府の長である総理に政策を問いただしたのに対して、「意味のない質問だよ」というようなヤジを飛ばしたことに抗議したんです。こういうときに、テレビの画面では憲法の議論をしてきたことについては一切とりあげないで、抗議している場面だけが取り上げられるわけです。その前の議論は取り上げられないのです。

「憲法議論しない」、なんてよく言われるじゃないですか。そうじゃないんです。私は誰よりも憲法について総理大臣と議論してきました。でも、議論でなく私が必死になっている表情だけを切り取って、「また怒っている」とインターネットで拡散するわけです。

私は、批判力が社会を動かすと思っています。ですから、国会でもおかしいことはおかしいと言ってきたわけです。メディアの一部の印象操作によって「いつもうるさいことを言っている」「いつも文句ばかり言っている女」というレッテルを貼られています。そういうことに私自身も心を痛めています。自身の活動が捻じ曲げられている、と思っています。

言い続けることで時代は前に進む

——こういう情報を作り手の方が流すと、受けるから流すんですよ？　そういう風潮を変えるのは教育だと思うんですが、女性を差別してはいけないという教育は熱心にはやらないですよ？

進化はしてきていると思いますよ。若い女性たちの意識が変わってきたし、若い男性たちも変わってきたと思います。例えば、選択的夫婦別姓ですが、私が議員に初当選した1996年に法制審議会で取り上げられました。まだ実現されていません。イエ制度を壊すとか家族を壊すだの過激な思想だと言われたのですが、今や若い女性も男性も、選択的に姓を選ぶのはいいことじゃないかと思う人が大半になってきているわけです。また、LGBTQ+の権利についても大半の若い人たちはいいじゃないかと、愛する人が男であろうが女であろうが、性にかかわらずなく愛する人との結婚は平等にできるのが良い、と変わってきているんですね。そういう意味では、時代は前に進んでいるのだと思います。私が25年前に初当選したとき「同性婚は認めるべきだ」と言ったら、「なんだ、あいつは」「変な奴だ」と見られたけど、今では国会の中でも徐々に超党派で賛同者は増えてきているのが現状なんです。

しかし、それと同時にバックラッシュがあります。そういう動きが加速してくると、それに対してイデオロギー的に賛成しない人たちが異常な攻撃をしかけてくる、これが何回もあったわけです。だって、ジェンダーフリーへのバッシングってすごかったですよね？　今も、LGBTQ+の差別禁止法を作ろうとしたら、一部の国会の中、また外でつぶしにかかるということが起きました。選択的夫婦別姓もそうでした。しかし、今の若い人たちが自由な考えをもってきていることに対する危機感の表れでつぶしに来ているのではないか、と思っています。

でも例えば、反原発だっかってはあらゆるところからバッシングを受けたけど、市民運動が声を上げ続けたから、今では常識になってきているじゃないですか。女性の選挙権とか男女平等も、戦前は私たち女性には選挙権がなかった。だけど大きな声を上げた女性たちがいて、当時、そういう女性たちはおかしいとか、あの家の嫁は恥ずかしいとかさんざんバッシングされて、異常な女たちのように捉えられたわけですが、そういう運動があったからこそ、厳しく社会の問題を指摘する人たちが現れて男女平等になり、女性の権利として投票もできるようになってきたわけです。言い続け

ることが社会を動かす大きな力になっている、と思うんです。

若い女性の覚醒で政治を変える

この間の選挙で私は惜敗しましたけれど、今までの選挙の中で3番目に多い票を取っています。1番目は鳩山政権が誕生した政権交代選挙のとき、2番目は立憲民主党ができた前回の選挙、そして今回は3番目なんです。

実は今回、若い女性が私に投票してくれたという実感があります。街頭でマイクを握って演説していると、ポツンと若い女性に向かっての方から見てくれているというか、聞いてくれていることがよくありました。若い高校生なんかもチラシくださいと来るわけです。18歳の女の子が初めての投票は辻元さんにします、と言いに来るわけです。私にお手紙をわざわざ届けにきてくれたりとかするんですよ。私だけが感じているのかと、一緒に活動してくれているボランティアとかスタッフに「なんか今回若い女性に手ごたえがあるんだけど」と言うのと、「私たちもそうなんです」と。

森元総理に功績があるとすれば、オリンピック憲章を知らしめてくれたことかなと。これを見るとジェンダー平等と書いてある。また、LGBTQ+についても差別

してはいけなさと書いてある。「なんだ、国際的に見るとわきまえない方が普通なんじゃないか」って知ることができた。

それと併せてMe Too運動(編注:私も(性被害者である」と声をあげるようになった運動)と

か、Black Lives Matter運動みたいな「なんで女だけハイヒールはかされなきゃいけないのか」とか、私のようなわきまえない女に対してのエールが増えているのを感じます。それが私の希望なんです。若い女性の覚醒で日本の政治を変えようというように今は思っています。

——選挙後「女、女、というから落ちたんだ」と言われたという記事を読みました。

支持者から言われました。これはショックでした。選挙中に蓮舫・辻元で集会やつたんですよ。そこに、女性の自治体議員が沢山参加してくれて、リレートークをやりました。そうしたら、「蓮舫・辻元って最も嫌われている女じゃないか、そういう2人が女を集めて集会しているから票が減ったんだ」と言われた。それは、親切で言っているんです。「辻元さんに通って欲しかったから、あえて言っているんです」と言う。

でもちよつと違うんじゃないか、と思います。それくらいして女性が声を上げないと、政治の場に女性が少なすぎる。まだ1割切っているわけですから、声が届かない

んですよ。ここに対する理解がなかなか進まない。

維新によるデマとDAPPIと

私は1年生議員のときからNPO法や情報公開法をはじめ、沢山の法律を作ったのに、選挙中、維新の吉村大阪府知事とかが来て、「辻元清美は何も仕事をしていない」というデマを流されました。そこで、山崎拓さんが「自民党の議員だった自分から見ても最も仕事している議員だと証明してやる」と言って応援に来てくれました。党派を超えて良心的な政治家とつながるのは良いことだと思いますが、それを批判されたのも残念です。

また、今、DAPPIが裁判(編注:ツイッターアカウントDAPPIの虚偽の投稿で名誉を傷つけられたとして、立憲民主党の小西洋之、杉尾秀哉参院議員が運営会社を提訴)になっていますが、私もDAPPIから相当攻撃をされました。意図的に発言をつなぎ合わせる、そういうメディアの影響は大きいと思います。

コロナと政治活動

立憲民主党を作ったときは、街宣車の上に立って演説をしない、車座集会とともにビルケースに立って視線を低くしてやろう、ということを徹底してきました。この

4年間でちょっとそれがおそろかになったというだけでなくて、後半はコロナの影響を受けました。

コロナは良い面と悪い面があると思います。まず、悪い面ですが、地域で集会ができなくなりました。私の場合、「辻元清美と語ろう会」というのがあって、地域の公民館・コミュニティセンター・幼稚園などを借りていつも秋に20から25カ所くらい細かく国政報告会をやってきました。これがコロナで2年間でできなかった。貸してくれる会場もなくなった。その影響は一つ大きいと思います。

良い面はインターネットで活動ができるようになりました。数日前、インターネット新年会というのを立憲民主党でやったんですが、これはオンライン新年会、リモート新年会で全国の立憲パートナーズの人たちに声をかけました。メール登録されている方あてに案内して、全国で二百数十人の方々が参加して行なうことができました。私は大阪から、泉健太代表は京都から参加して、他の参加者も自分の家にいて入れ替わり立ち替わりインターネットに入ってもらいました。その中で、大阪ボランティア協会の早瀬さんという方が司会をして、市民参加の政治はどうすればできるかという討論会をやりました。

画面に参加者の顔がバートと並びますが、例えば世界中から参加ができるんですよ。これは今までになかったことですよね？ 私、面白いなあと思ったんですよ。1人ずつ手を挙げて意見は言えないけれど、参加者がチャット機能で意見を書いてくれます。すると、私たちもチャットを見ながら、「こういう意見がきてます」とか「これに対してはこうです」と話せるんです。ですから、これはオンライン車座集会みたいなもの。これなら一斉に全国でどこでもできるから、これから活用していくと良いと思っています。

リアルで人と人が会うというのももちろんとても大事です。どちらが良いというのはなくて。併用だと思っんです。今日はお目にかかってこうしてインタビュウを受けていますが、リモートで受けることもあるんです。それぞれお家にいて、ネットですつないで、それぞれ同じことができるんです。そういう意味で、リモートとリアルの両方をうまくベストミックスさせた市民運動や政治活動がこれから大事だと思っています。

SNSの時代に市民の声をどう受けとめるか

ラインで意見をいただいたり、ツイッ

ターに來たりした意見に、どこまで返信するかということは難しいです。できるだけ全員に返信しようとする、一日中やっとなきゃならなくなる。自分では無理なんです。スタッフを特別に雇うか、というところまでやれない。というような事があるので、まとめてお返事したり、そこは永遠の悩みなんです。市民運動でも、意見を募集したとして全部に答えられるかというと、答えられないでしょう。だからリモートによるコミュニケーションというのは良いんですが、活かしかるだけのマンパワーがいる。そこが大きな課題ですね。

「返事が来ないなら支持やめます」ということになったらどうしようって？ なるんです。なかなか悩ましいところですね。SNSの時代、リモートの時代になっても、結局は人がどう対応しなくてはならないのが問題となっています。試行錯誤している、ということではないでしょうか。

市民運動と政治と

市民運動と政治が違ふところは、市民運動は100%正しいことを政治にもプレッシャーをかけて実現しようとする。それで良いと思う。しかし、政治は与党、野党、考え方の違う人たちと、調整をかけつつ、ちょっとでも良くしていこう、ということ

なんです。

初当選が同期の保坂展人世田谷区長は「5%の改革」と言っています。95%は継続せざるを得ない、行政の長になっても。しかし、5%ずつ改革していくことによってどんどん良くなっていく。そのことに対して、市民運動の人からは「保坂区長になったのにどうしてすぐやらないんですか」と。でもそれをやったら独裁になってしまう。市民運動と政治、それぞれの役割の違いを理解した上でコラボしていくことが必要だと思います。

——市民の側もそういうことは十分理解して、関係をバージョンアップさせていきたいですね。

今夏の参議院選挙について

リベラルの再構築。リベラルの火を消さない。維新が今は大阪ですが、全国に広がってきています。ああいう「改革保守」を謳う勢力が伸びてくる可能性があります。私が教えを受けてきた、土井たか子さん、吉川勇一さん、筑紫哲也さんらの戦後民主主義のきちんとした理念を引き継ぎながら、それをリニューアルしていくことです。

いま、立憲民主党をはじめとするリベラル勢力の肩身が狭い、火が消えるんじゃないか、という危機感があります。しかし、私はリベラルの政治勢力をしつかり国会の

中に打ち立てなければならぬと思っただけで活動してきました。参議院選挙でもリベラルの旗を打ち立てる、そういう立ち位置でやっていかなければならないと思っています。その中で、政策的には「いのちも仕事も民主主義も」と言っています。

いのちの問題では、コロナ禍でわかったことですが、効率効率といって保健所を削減し、公務員減らせれば良い、官から民へという流れでは命を守れません。これを変えていかなければならないと思います。公的な仕事の見直しで命を守ることです。

また、米軍基地からオミクロン株が滲み出て来ている現状を見ても、日米地位協定の見直しをしなければ命は守れません。憲法改正よりも不平等な日米地位協定の改訂が必要です。

仕事では、若い人の非正規雇用を正規にしていって、また不公平な税制を直していく、公平、公正でオープンな循環型の経済に変えていかなければなりません。広がってしまった格差解消が必要です。

隠蔽、改ざんで壊されてしまった民主主義の立て直し、立憲民主党では公文書管理庁を作れと言ってきました。これも訴えていかなければなりません。

その上で、私は「男女平等なくして平和もないし、民主主義もない」と思っている

ので、ジェンダー平等を訴えなければならぬと思っています。

中国との問題ですが、中国にはさまざまな問題があり、軍事的にも拡張主義をとっていることは事実です。しかし、そうであればあるほど、政治家がその危機を煽るような発言をしてはならない。そういうときほど危機をどう収めていくかを考え、重心的に抑制的な発言をすべきです。今の状態では余計危機を大きくしているように思えます。

追記

大阪に拠点のある辻元清美さんだが、今回東京6泊のぎっちり詰まった仕事の合間に、宿泊先ホテルで1時間ほどインタビューを受けてくださった。冒頭、市民意見広告運動との関わりや当会へのリスペクトを表明されるなど、「人たらし」の一面も。市民運動として特定の政治家への支持を表明することはできないが、与党、野党にかかわらず、良心的な政治家との関わりをもっていくことも大切であると思ったインタビューだった。

聞き手・まとめ

山崎公江（やまさき・まさえ／本会々員）

北原博子（きたはら・ひろこ／本誌編集委員）